

戴帽式を終えて

准看護学科第 62 期生 猪爪 愛

戴帽の儀は、准看護師を目指す私たちのまさに第一歩となりました。ナースキャップと共に、先生から「おめでとう」と声をかけて頂いたときは、今日まで導いて下さった先生方への感謝の想いでいっぱいになりました。それと同時にこのキャップに恥じない准看護師になるためには、努力を惜しんではいけないと改めて感じ、身を引き締めることができました。



戴帽式の練習は、ナイチンゲール誓詞とクラスの誓いの言葉の斉唱から始まりました。同じタイミングで皆が声を出してくれるかという不安から何度やっても出だしがバラバラで、何とか揃い始めたかと思えば、次の日には振り出しに戻ってしまうというような日が続きました。それでも、戴帽式には皆で出るんだという想いを胸に、クラスのために自分たちの意見を伝えあいながら修正を重ねると、二人三脚のようにクラスメイトを信じて声が出せるようになり、息が揃い始めました。

迎えた当日は、先輩方から受け継いだキャンドルの灯火のもと、全員の揃った声をホールに響き渡らせることができました。終始緊張しましたが、凜と立つクラスメイトが誇らしく、「一人じゃない」と皆を見て心を落ち着かせることができました。

コロナ禍で入学した私たちは、日々徹底した感染対策を行いながら過ごしてきました。感染蔓延の影響を受け、感染への不安や様々な行動制限に苦しむこともありましたが、准看護師になるという同じ目標に向かって、年齢や性別に関係なく皆で励まし合い、今日まで頑張ってきました。そして施設の方や先生方、家族や友人などたくさんの人の支えがあって、この日を迎えることができました。皆でこの場に立てたこと、また、今年はその姿をご家族の方々にも見守っていただけたことが嬉しかったです。

看護概論の教科書に、「患者さんは看護師という名称を信頼して看護を委ねている」という言葉があります。それだけに看護師を目指す道には大変なことが多いかもしれませんが、この日、皆で誓ったことやお世話になっている方々への感謝を忘れずに、これからも皆で協力し合いながら進んでいきたいと思えます。